

《常識》と相談

精神科医・作家 **なだ いなだ**

狐つきは何故消えた

昔、まだ分裂病などという病名が使われていない頃の日本で、もっとも多くの《このころの病気》は、《狐つき》でした。狐の真似をして、噛み付いたり引っ掻いたりします。江戸でも田舎でも見られましたが、この病気は明治以後どんどん減り、1950年ごろには、日本では見られなくなりました。なぜ無くなったか。狐は人を化かす超能力をもっているという迷信を、人々が信じなくなったからです。《常識》で考えれば、そんなことはありえない、と思うようになった。そして、小学校は、その迷信撲滅に大きな役割を果たしました。つまりは教育が《狐つき》というこのころの病気を滅ぼしたのです。

他にも新しい《常識》が、国民的な病気を消滅させた場合もあります。たとえば、明治の前半まで、脚気という病気があり、その死亡率は非常に高かった。将軍家茂も、その妻和子内親王も、孝明天皇もみな脚気で死んだ。白米ばかり食べていたからです。日本の陸軍では、日露戦争まで、脚気で戦病死した方が戦場で戦死したものよりも多かったと言われています。白米が原因だから、兵隊に麦飯を食べさせようと主張した軍医もいましたが、森鷗外たちが反対して、白米を食べさせ続けました。そのために万を超える兵士が死にました。しかし、麦飯、あるいは七分づきの米を食べると脚気が防げるという《常識》が広まってからは（後にはビタミンB1で脚気が防げるという常

識）、死者はまったく出なくなりました。《常識》が、どんなに重要な役割を果たすかが分かったでしょう。

常識って何だろう

《常識》は、現代の日本では、気軽によく使われる言葉です。「あの人は《常識》がない」「いちいちわたしの意見を聞きに来ないで、《常識》で判断しなさい」「遅れてますね。学生がケイタイのメールで連絡をとっている。これはもう今や《常識》ですよ」などなど。

それほどよく使われる言葉ですが、「そもそも《常識》って何ですか」と問いかけられると、「《常識》って、なに、その、《常識》じゃないか」と口の中でもごもごいう人が多いですね。うまく正確に説明できる人は意外と少ないものです。たいていの人は、字引を持ち出すことになります。

字引を引いてみましょう。電子版「広辞苑」の常識の項目を書き写します。

「(common sense) 普通、一般人が持ち、また持っているべき知識。専門的知識でない一般的知識とともに理解力・判断力・思慮分別などを含む。例「常識のない人」

広辞苑には、日本語辞典であるにもかかわらず、最初に英語が出てくるので、はは一んこれは英語の訳語か、と分かります。そこで英和辞典で引いてみます。「Common sense (経験から身についた) 常識的な判断力、良識、分別」

なるほど英語の辞典の方が簡潔で、より分かりやすい。でも、常識がなにかを知りたいのに、《常識的な判断力》とは恐れ入ります。広辞苑はもたもたしていますね。最初の一節は、意味がよく分かります。しかし、これは漢字訳の「識」に引っ張られた解釈です。知識の意味に傾いています。Sense は判断力の方に傾いた言葉です。「専門知識でない一般知識とともに理解力・判断力・思慮分別を含む」などというのは、くっつけただけ却って混乱を招くような蛇足です。

では、ぼくの定義を示します

『《常識》 社会がその調和のある活動を維持していくために、社会の各人が持つべきだと考えられ、そして大部分の人が成人になる頃には、経験を通して実際に身につけている知識に基づく判断力。絶対的でも普遍的でもなく、それぞれの社会にはそれぞれの常識があり（社会が違えば常識も違う）、その常識はまた、時代とともに変わっていく。』

少し長い定義ですが、これで最短、これ以上短くすることもできないけれど、長くする必要もない。

常識の歴史的意味

では何時この言葉が広まったか。それはなぜか、を考えましょう。そのヒントは広辞苑の中にあります。常識の項目の後を見ますと、少し飛んだところに、「常識学派」、「常識哲学」という言葉があります。そして常識哲学を引くと、「パークリーの主観的観念論やヒュームの懐疑論に反対し、数学・論理学の公理、因果律、外界の实在性、自我の存在、善悪の区別など《常識の原理》

を根本とする哲学。スコットランドのリード及びその学派（常識学派）、現代ではムーアが代表」と書かれています。

常識哲学の主唱者トーマス・リードが生まれたのが1710年ですから、だいたい18世紀の中ごろから、この言葉が、ヨーロッパの一角で使われ始めたことが分かるでしょう。18世紀の後半、アメリカが独立し、フランス大革命が起こる。その前ごろから、この言葉が独り歩きし始めます。はじめは哲学者が、細かく定義して使った言葉ですが、すぐに一般の言葉になりました。《常識》という言葉が、《常識になった》のです。トーマス・ペインという英国人が独立戦争を始めたばかりのアメリカに行きます。そこでかれは《常識》という題のパンフレットを出版します。これが数ヶ月で10万部を売りつくすという、当時としては、大ベストセラーになります。かれは自分の経歴をその中に書いてありますが、哲学者とは全然いえないような人で、一時は海賊船に乗り込んだりしています。《常識》はこういう人たちの間まで広まっていたといえるでしょう。この本でかれは、《独立は今や常識です》といい、米国の独立宣言を出させるきっかけを与えたのでした。

自由と常識

それ以前の社会は、自由のない社会でしたが、個人の自由を求める声が大きくなり、それが民衆の運動になり、革命となったのです。アメリカの独立も革命の一種です。しかし、自由を民衆に与えたくない人々がいました。人間が自由になったら、個人はめいめいが勝手なことをやり、社会は無秩序になり混乱してしまう、という推測が、反対の理由でした。それに対して、人間をもっと信用しろという人たちがいました。

人間には《常識》がある。自由になっても、その《常識》があれば、社会の秩序と調和は保たれる、とその人たちは考えました。かれらは自由主義者と呼ばれました。アダム・スミスは経済学の祖のようにいわれますが、かれは常識哲学者の一人で、自由主義者で、国が余計な干渉をしないほうが、経済は繁栄する、という考えでした。だから、英国人であり、時の政府からにらまれましたが、植民地アメリカの独立、アメリカの自由を、支持したのです。

《自由》と《常識》は、封建社会の秩序の崩壊した後、新しい社会を動かす両輪のようなものでした。なんだ、人類の歴史では、最近の発明ではないか、と思うでしょう。でも《常識》は、名前は違っていても、昔にもありました。「そんなこと常識よ」という言葉が発せられるような状況で、江戸時代の町人は「そんなこと当たり前じゃないか（アタリメーヨ）」とよくいいました。《常識》という言葉が、永遠の昔からあったような気がするほど、現代社会に馴染んでいるのは、《当たり前》が《常識》に素直に移行したせいです。

その《当たり前》は《常識》という言葉が流行する前から、人間が常識的に生きていたことを示しています。集団には掟の他に《しきたり》あるいは《習慣》というものが在り、個人個人は育っていく間に、それらに馴染んでいき、それに従って生きていました。いいかえれば、それが彼らの当時の《常識》であり、《当たり前》の内容でした。狭い集団から外に出ず一生を終わる人間は、親と同じように、何代も何代も過ごしてきました。それに飽き足らない人は、何時の時代にもいましたが、そうした人たちは「狂ってる」と言われました。

社会が拡大する

《当たり前》が《常識》に変わるのには、社会の大きな変動に伴っていました。

小さい社会が、産業革命で壊れていきました。より大きい社会に飲み込まれていったのです。この200年の間に、人間は《掟》と《しきたり》で縛られた小さい社会から外に出て、自由に生きるようになりました。ぼくの祖父母は新潟の片田舎で生まれ、そこで祖先と同じように生き、同じところでなくなりました。結婚は14か15歳、たいてい親の命令で決まりました。そして10人以上の子どもを生む。それが常識でした。しかし、ぼくの父母になると、新潟から東京に出てきて、東京で亡くなります。そして教育が大切と考え、子ども全員を大学まで行かせ、学ばせてくれました。息子の一人のぼくは、若い時フランスに行き、そこで知り合った女性と結婚しました。どんどん生き方が変わり、接触する範囲が広がって行きます。常識も広がって行きます。

こんなに急速に社会が拡大し変化したのです。それに伴って、世代間で《常識》の違いが生まれました。あるローカルの文化特有の《狐つき》のような病気は消え、世界中どこでも見られる分裂病(統合失調症)が広まってきた。

また、異なった《常識》の間では、しばしば衝突が起ります。古いね、などと親たちはいわれます。親たちは、最近の若い者は《常識》がないと慨嘆します。また外国に行って、カルチャーショックのような形で、《常識》の違いが感じられるときもあります。そこから来るストレスが病気を起こします。

そこでは包容力のあるあたらしい《常識》が求められる。

常識と良識

自由な進化する社会で、人間は、他人もきっこうこう考えているに違いないことを《常識》として、自分の中に取り入れ、それを判断の規準にして、他人と調和して生きるように努力してきたのです。

スクランブル交差点を渡る人々の姿を、高いところから見てみましょう。どこからとなく集まってきた見知らぬ人たちが、誰に命令されているわけでもないのに、信号を合図に、実にうまく行き交います。向こうから来る人を右に交わしてよけ、左から来る人を、ちょっとスピードを上げて、右から近づく人はスピードを落として、先に通らせます。ゴチャゴチャになりぶつかり合いながら、渡るではありません。ぶつかり合うことはめったにありません。もしあったら、わざとぶつかって、難癖をつけて喧嘩を売りたい《あんちゃん》（これはちょっと古いかな）でしょう。こんな調和の能力を《常識》の形で身につけているのです。

その常識のもっとも深いところにあるのが、「自分のして欲しくないことは他人にもしない。自分がして欲しいことを、他人にする」という《当り前》のことです。これは聖書の中にありますから、聖書が書かれた頃からの、社会で生きていくための知恵であり《常識》だったのでしょう。《常識》と呼ばれない《常識》でした。ヨーロッパでも東洋でも通じる《常識》です。

教育の基本は、なにか。ぼくは、いい学校に進学させることでも、ノーベル賞をもらえるような研究者を何人も作ることもなく、ぼくたちの社会を、生きやすくするために、必要な《常識》を生徒に持たせることだと思っています。《常識》を身につけさせる、実践の場が、公教育だったと考えます。

《常識》と響きの似た言葉に《良識》があります。デカルトが言い出した言葉ですが、《常識》とは根本的に違います。《良識》とはよい判断を下す元になる能力ですが、《常識》はよいも悪いもありません。みんなが考えていることであり、みんなが知っていることである。知る必要があることである。それだけです。だから、《常識》は社会のその時にたまたま多数意見であるに過ぎない。それゆえ、偏見であることもしばしばあります。ここが重要なところですかつては、地球は平たいと思われていました。それが《常識》でした。今はそんな考えは馬鹿げていると思われています。しかし、地球は丸くて、太陽のまわりを回っている、と考えている人は、かつては少なかった。そう考えた人は、最初は一人、その考えを理解する人が出て二人になり、さらに三人になり、その考えが広まって行きます。ついにはそちらが多数を占めます。それが新しい《常識》になります。《良識》だったら、永遠であり普遍です。こんな風に、ルネッサンスの頃から、人間の世界に関する《常識》は、新しい発見によって変わり続けました。

それに対応すべく登場したのが学校です。最初はエリートを教育していましたが、人間がより平等で自由になる（原則の上ですが）につれて、だれもが高等教育を受けるようになります。教育は与える側にとっても、与えられる側にとっても、必要だと考えられて、これだけ社会に広まりました。

アインシュタインは、「《常識》とは、人間が18歳までに身につける、偏見のコレクションのことである」と定義していますが、これは、冗談のように見えて、じつは、鋭い直観だと思います。創造者にとっては、

《常識》はしばしば邪魔になる。そして創造者は新しい《常識》を創っていく。古い《常識》を壊していく。社会の歴史は、《常識》が創造者たちの手によって作りかえられ、変遷してきた歴史です。歴史をみると、アインシュタインの言葉が、納得できます。

若い時の悩み

若い時は、自分を中心に考えます。そのうちに、社会の側にたった目で、自分を見つめて行きます。その過程で、自分が失われそうになり悩みます。昔の閉鎖的な社会に属し、それに依存していれば、気楽だったでしょうが、自由はただでは手に入りません。自由な社会では自立した上で、自分たちで支えあって行かねばならないのです。

そういう個人の成長の歴史が小説に書か

れたものが、教養小説、ドイツ語でビルドゥンクスロマンと呼ばれるものでした。それを昔の若者（ぼくたち）は自分の成長の助けとして読んだものです。常識として取り込むために。日本では純文学の名で呼ばれた私小説がそれを担ってきました。あるいは漱石の小説がその役割を果たしました。今の若者が、何を助けに、成長していくのかは分かりません。きっと何かがあるのでしょう。

いずれにしろ、若者は次々と新しい社会に触れ、そこで新しい《常識》に接し、葛藤を経験します。

相談は、そうした若者の《常識》の形成にかかわる仕事です。こう考えると、全体の中で相談がどのようなところに位置するか、どのような意味を持つか、分かってもらえるのではないのでしょうか。

Profile **なだ いなだ** 精神科医・作家



1929 年生まれ

1953 年から 1 年間、フランス政府給費留学生。フランスに滞在。

このときフランスで、最初の向精神薬クロールプロマジンの、臨床利用が始まる。

1963 年から 1 年間、WHO 留学生としてアルコール依存治療研究視察のためフランスを中心に欧州 5 カ国に留学。

1964 年 9 月より国立療養所久里浜病院アルコール症専門病棟で治療にたずさわる。この方面の先駆者かたわら文筆活動を続ける。

現在は執筆活動に専念。

2003 年 4 月、インターネット上の仮想政党、老人党を提唱。こうすれば政権交代は可能と説く。

小説、詩、評論 エッセイ作品多数

中公新書「お医者さん」で毎日出版文化賞

著書多数

最近の著作

「こころの底に見えたもの」

「こころ医者講座」

